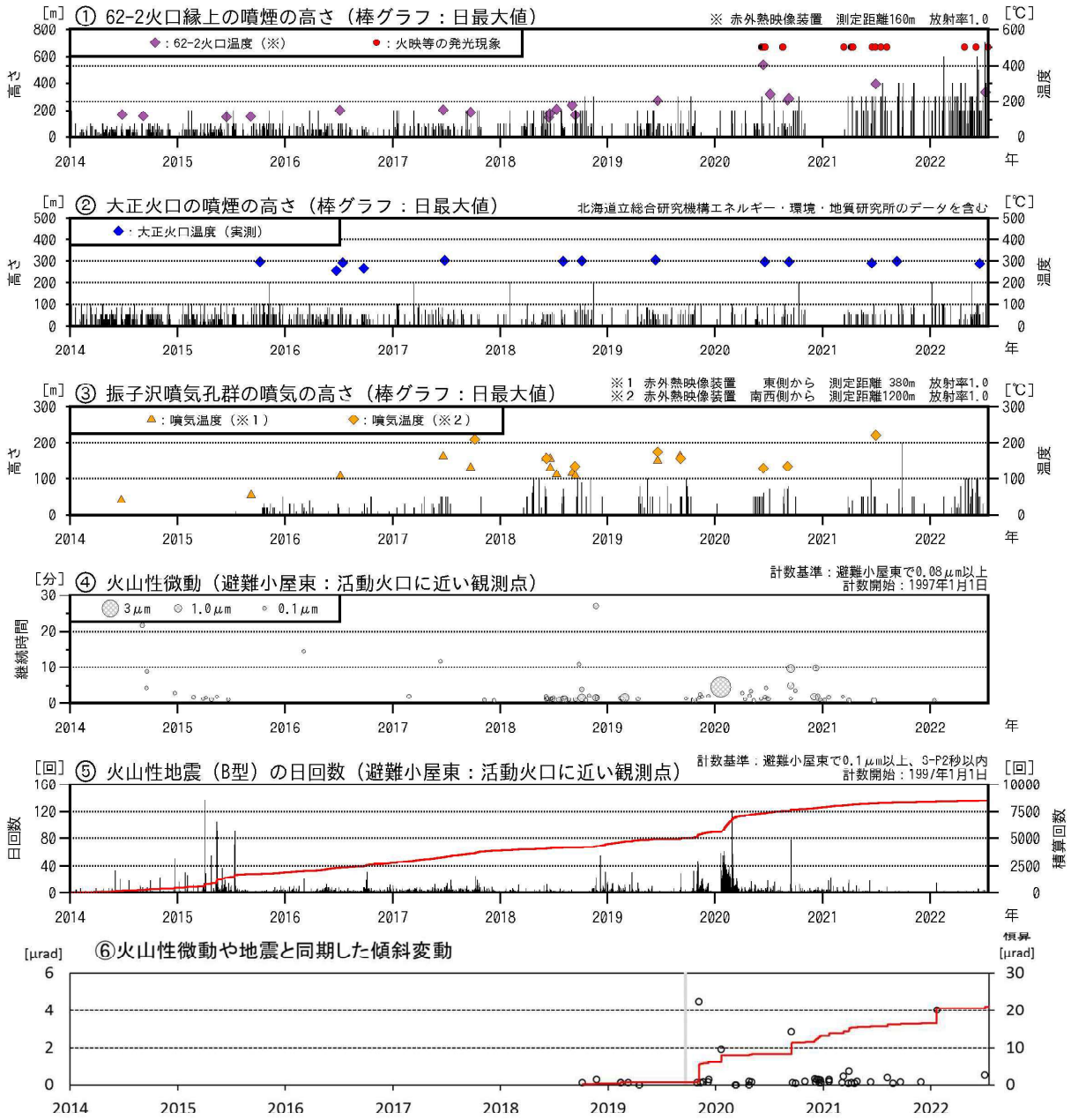


図２　十勝岳　火山活動経過図（2014 年１月～2022 年７月 16 日）

①の◆は図１-⑤の×に対応しています（図１-⑤のキャプション・注釈を参照ください）。
③の噴気温度は赤外熱映像装置により測定しています。
⑤は主に 62-2 火口付近のごく浅い所（図９中の破線に囲まれた領域内）で発生したと推測されるＢ型地震の回数を示します。
⑥は北海道大学が設置した前十勝西(北)観測点の傾斜計で観測された水平２成分合成変動量 0.1μrad 以上を対象として、2018 年９月 26 日以降のデータを表示しています。

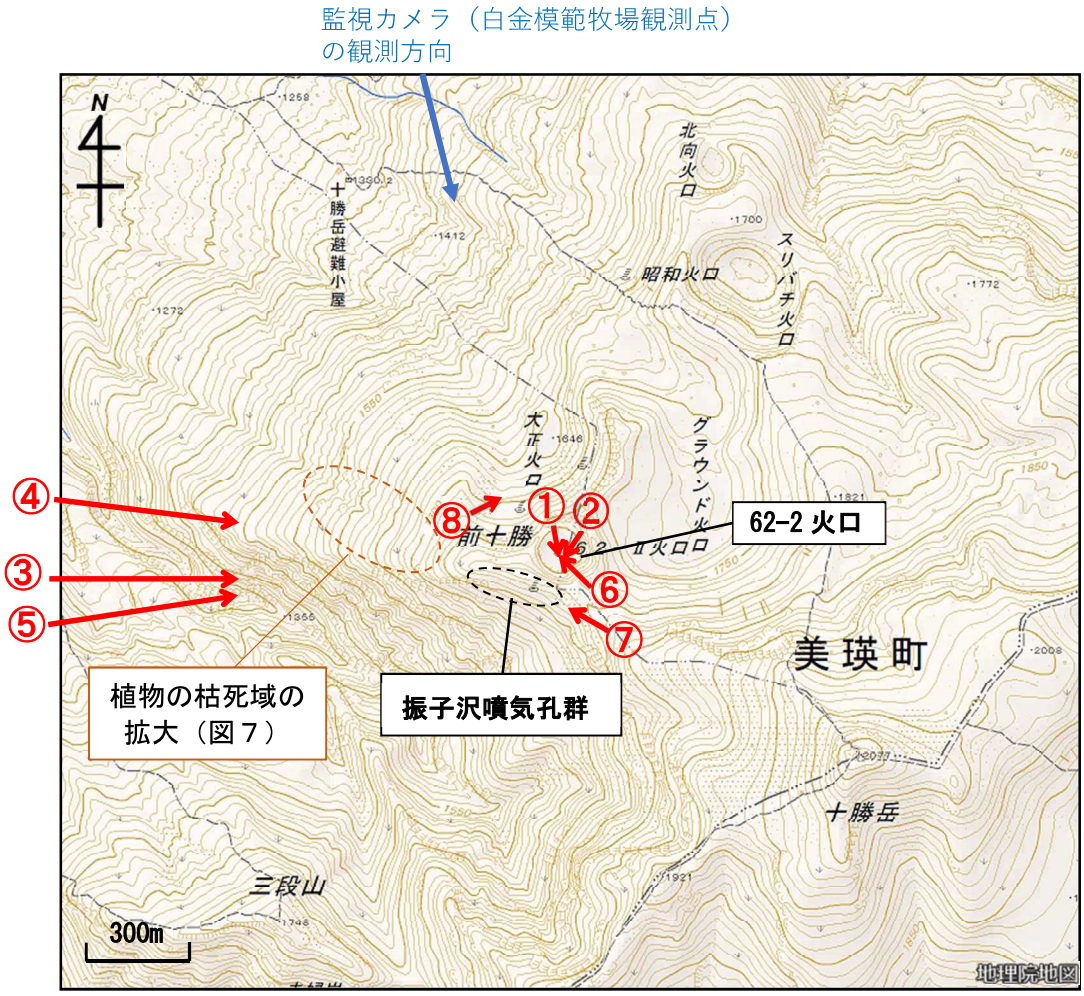


図３　十勝岳　火口周辺図と監視カメラ（白金模範牧場観測点）の観測方向（図４、５）、写真及び赤外熱映像の撮影方向（矢印）（図６～10）

図４　十勝岳　北西側から見た火口周辺の状況及び火口周辺図（白金模範牧場監視カメラによる）

図５　十勝岳　山麓高感度カメラで観測された62-2火口発光現象（白金模範牧場監視カメラによる）

- 2020 年６月や 2022 年４月の発光現象は、62-2 火口内の発光源（高温のガス噴出や硫黄の燃焼等）が火口上の雲や噴煙を照らした微弱な火映と考えられますが、2021 年３月 13 日や 2022 年６月６日などの発光現象は、62-2 火口内の発光源を直接観測した可能性があります。
- 2021 年７月以降に観測された発光現象はいずれも火口内壁のごく狭い範囲で確認されたもので、2020 年６月に観測された微弱な火映と比べると、強度はさらに弱く、発光した時間も短いものでした。

表１　十勝岳　2020 年６月以降に 62-2 火口で観測された発光現象
（山麓に設置された高感度の監視カメラによる）

観測日	発光現象
2020 年６月 7 日～６月 19 日	「微弱な火映」を断続的に観測
2020 年８月 17 日～８月 18 日	「ごく微弱な火映」を断続的に観測
2021 年３月 13 日～３月 14 日	「ごく微弱な発光現象」を断続的に観測
2021 年４月 7 日～４月 13 日	「微弱な火映」を断続的に観測
2021 年６月 17 日	「ごく微弱な火映」を観測
2021 年６月 28 日	「ごく微弱な発光現象」を観測
2021 年７月 17 日	「ごく微弱な火映」を観測
2021 年８月７日	「ごく微弱な火映」を観測
2022 年４月 27 日～28 日	「ごく微弱な火映」を観測
2022 年６月６日	「ごく微弱な発光現象」を観測
2022 年７月 16 日	「ごく微弱な発光現象」を観測

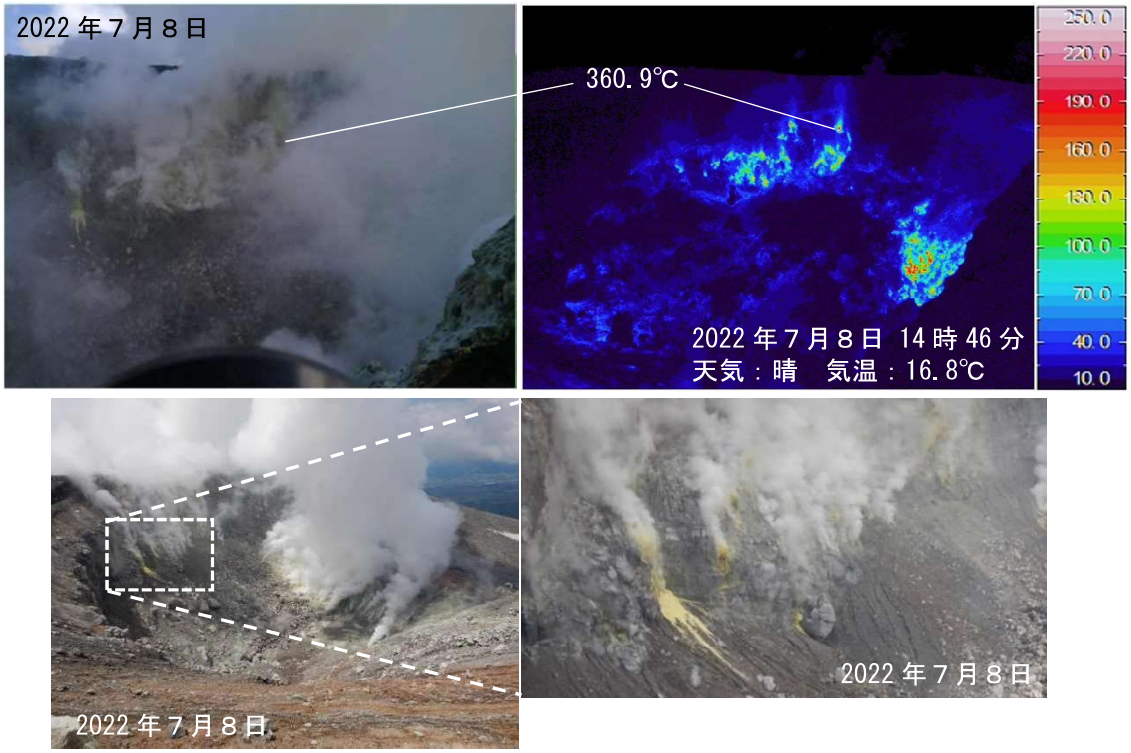
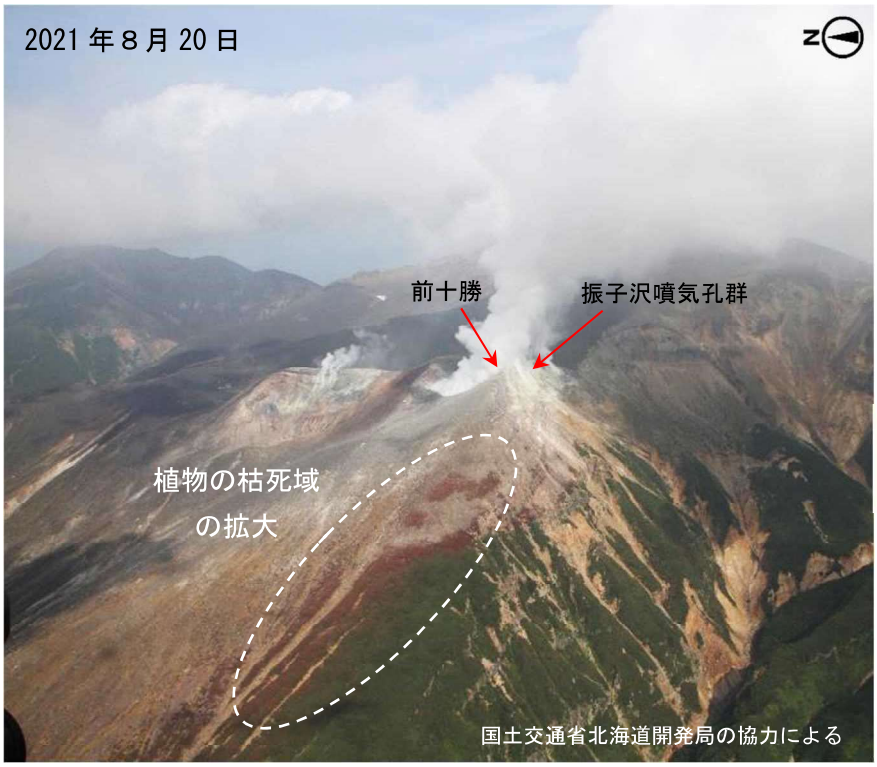
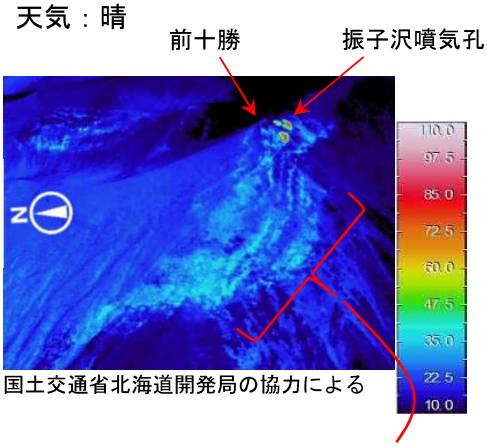


図６　十勝岳　62-2火口の火口縁からの火口内南側の状況及び赤外熱映像装置による地表面温度分布
上図：北側（図３の①）から撮影　下図：北東側（図３の②）から撮影

・2022年６月６日に高感度の監視カメラでごく微弱な発光現象が観測された62-2火口内南側火口壁の一部で、自然硫黄の発火温度（248-261℃、Meyer(1977) による)よりも高い温度が観測されました。
・火口内南側の一部噴気孔から溶融した硫黄が流れ出ている状況を確認しました。



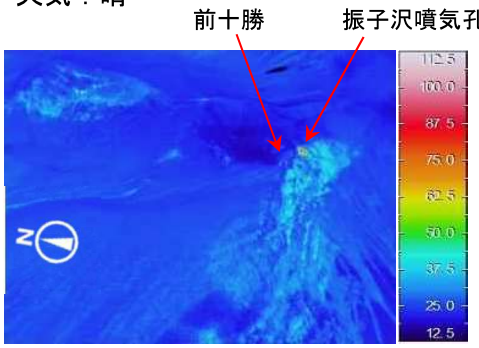
2021 年８月 20 日 15 時 02 分
天気：晴



国土交通省北海道開発局の協力による

振子沢噴気孔群から西側
に延びる地熱域

2018 年７月 30 日 16 時 13 分
天気：晴



国土交通省北海道開発局の協力による

図７　十勝岳　2021 年８月に実施した上空からの観測における赤外熱映像装置による前十勝周辺の状況と地表面温度分布
上段　：西側上空（図３の③）から撮影
下段左：西側上空（図３の④）から撮影
下段右：西側上空（図３の⑤）から撮影
※可視画像内のほぼ同一の領域を白色破線で囲んで示しています。

・前回（2018 年７月）の観測と比較して、前十勝西側の植物の枯死域が拡大している状況を確認しました（白破線内）。また、振子沢噴気孔群から西側へ延びる地熱域が前十勝西側尾根筋まで広がっていることを確認しました。